

【新連載】

ポライトネス理論の展開



宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

①

「ポライトネス」という概念

— なぜ、「ポライトネス」という概念の理解が共有されにくいのか

最近やっと、「ポライトネス」(politeness) という言葉が、日本の言語学、日本語学、日本語教育に関する学界でもよく聞かれるようになり、その関心の高まりを示している。そういう動きとは裏腹に、「ポライトネス」という概念は、いまだ、研究者の間でさえ、正確な理解が共有されているとは言いがたいのが現状である。

ここで言う「ポライトネス」とは、一言で言うと、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」すべてを指すものとする。つまり、逆に言うと、相手が不愉快でない、心地よいと感じる言語行動は、例えば、「タメ口」であつても、「ジョーク」であつてもポライトであると捉える。また、「言葉遣いは丁寧」でも、どこか感じが悪く不愉快であるという「慇懃無礼」な言語行動は、文字通り「無礼」なのであり、「ポライト」ではない。つまり、「ポライトネス」は、「対人コミュニケーション」における「言葉遣い」というツールそのものの「丁寧度」を扱うのではなく、その相手とのコミュニケーションが「心地よいかどうか」という、「言葉遣い」という

ツール」の「使用効果」を問題とするのである。このようなポライトネスの捉え方は、ブラウンとレビンソン (Brown & Levinson: 以後B&L) の「ポライトネスの普遍理論」における定義に基づくものであり、タメ口の捉え方などの例は、それを日本語にあてはめて筆者が解釈したものである。

一見、単純に聞こえるこの「ポライトネス」という概念の捉え方・解釈の違いが、専門的には、内外の、特に言語学の領域、および「ポライトネス研究」において、この二十数年來、様々な誤解や混乱を引き起こしてきたと言つても過言ではない。その混乱の原因は、以下の三点にまとめられる。

① 言語学においては、「語用論的アプローチ」自体が比較的新しく、「ポライトネス」を「言語形式の丁寧度」の問題としてではなく、「言語使用の効果」の問題として捉えるという「語用論的関心」が十分に理解・共有されていない。

② 敬語体系を持つ言語においても、「ポライトネス」は、「敬語使用」のみを意味するものではないことは、理解されてきつつある。しかし、「ポライトネス」の定義は、語用論的アプローチの中でも、レイコフ・R (Lakoff, R.) やリーチ (Leech) など、研究者によって異なると

いうことが、十分に認識されていない。つまり、本来は、書き手自身が「ポライトネス」という言葉によって、どういう定義のポライトネスを意味するのかということを確認してから用いる必要があるにもかかわらず、実際には、あいまいに用いられることが多い。

③ 最近では、「ポライトネス」と言うと、ブラウンとレビンソンの「ポライトネス理論」(二六三) における「ポライトネス」を指すものであると理解されることが多くなってきた。そういう意味で、「ポライトネス」の概念がある程度共有されるようになったように見える。にもかかわらず、現実には、このB&Lの理論特有の「ポライトネス」の定義や捉え方自体は、正確に理解されているとは言いがたい、この包括的な理論の異なる側面が多様に解釈され、誤解されていることが非常に多い。

これまでに提出されたいくつかの語用論的なポライトネスの理論(原則)の中でも、最も包括的で影響力が大きいものと評価され、また、その評価と同じく誤解や批判も浴びているのが、③にあげたブラウンとレビンソンの「ポライトネス理論」である。ブラウンとレビンソンは、彼らの定義する「ポライトネス・ストラテジー」を生み出す「動因」と

「フェイス処理の原理」(第三回以降に詳述)は、「普遍的」であると主張している。しかし、この「普遍性」の解釈や捉え方が、研究者によって著しく異なり、それが、この理論に対する多くの誤解・曲解を生み出してきた。ブラウンとレビンソンのポライトネスの普遍理論の概要、および、その曲解の原因等については、後に、詳述していく。

本連載は、まず、上記三点に起因する「ポライトネス」、および、「ポライトネス理論」の研究領域における内外の混乱の原因をできるだけ整理して論じることによって、B&Lの「ポライトネス理論」の正確な理解を促すとともに、「ポライトネス理論」、ひいては「対人コミュニケーション論」について、より生産的な議論ができるような土壌を作ること、に貢献することを企図するものである。その第一歩として、B&Lの「ポライトネス理論」以降の新展開としての「ポライトネスの談話理論」の構想(宇佐美, 2002)を提示し、今後の議論のたたき台としたい。

二 本連載における用語の定義・捉え方

本連載では、「ポライトネス」という用語は、「ポライトネス」、および、ポライトネス理論に対するいくつかの異なる立

場やアプローチ全般に言及する際に総称的に用いる場合」(広義)と、「B&Lのポライトネス理論において定義されている『ポライトネス』を指す場合」(狭義)と、二通りの意味で用いる。また、広義で用いる場合も、「ポライトネス」の異なる捉え方を明確にするために、「発話の運用効果、言語使用の効果」に視点を置くポライトネスを、特に「語用論的ポライトネス」と呼んで、従来の意味での「言葉遣いの丁寧さ」を指す「規範的ポライトネス」との区別を明確にすることもある。

連載の前半で詳述するブラウンとレビンソンのポライトネス理論における「ポライトネス」の定義を最も簡潔に表すと、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語ストラテジー」ということになる。つまり、B&Lのポライトネス理論は、発話の運用効果に視点を置いた「語用論的ポライトネス」の理論であるということを、まず、明確にしておきたい。

これまでは、欧米の広義のポライトネス研究においても、日本の敬語研究などにおいても、「ポライトネス」(Politeness)の定義があいまいなままに、「敬意」(deference)、「尊敬」(respect)、「改まり度」(formality)、「丁寧さ」

(politeness)などの用語が、「ポライトネス」(politeness)と明確に区別されることなく、時には、相互交換可能な意味合いで用いられてきた感がある。これらの概念は、主に、敬語研究などの「規範的ポライトネス」の研究において言及されてきた概念である。しかし、B&Lのポライトネス理論では、後述するように、ポライトネスを、人間にとって普遍的な欲求としての二種類の「フェイス」を鍵概念とする「フェイス処理行動」として捉えているため、これらの概念は、前面には出てこない。これらの用語や概念は、確かに、B&Lの定義する「ポライトネス」とも関係はあるが、「ポライトネスそれ自体」とは異なる概念であり、明確に区別して論じられる必要があることを強調しておく。

各個別言語の「敬語使用」と「ポライトネス・ストラテジーの使用」、および「敬語研究」と「ポライトネス研究」も、それぞれ明確に区別して論じられる必要がある。つまり、「敬語使用」と「ポライトネス・ストラテジーの使用」とは、同義ではない。敬語を使っているポライトでない場合もあれば、タメ口を「ポライトネス・ストラテジー」として用いることもできるからである。このように、「ポライトネス研究」は、タメ口の使用もポライトネス・ストラテジーの一つ

になると捉えて研究対象とするとともに、敬意を表すために用いられる「敬語」も、懸念無礼な言語行動における「敬語」もその研究対象とする。そういう意味で、「敬語研究」を含むものであると言える。ただし、ポライトネス研究と敬語研究両者の関心や目的は異なるものである。また、ポライトネス研究が敬語研究を含むというのは、あくまで研究対象の範囲の相違を示しただけであって、決して敬語研究が劣るということではないということも強調しておきたい。重要なことは、どちらの観点から研究を行うにしても、その目的や観点を中途半端に混同して論じてはいけないということである。

本連載では、一旦、Usami (1993)に倣い、「語用論的ポライトネス」を、「円滑な人間関係を確立・維持するために機能する言語行動」と定義する。「実質的ポライトネス」という用語をほぼ同義に用いることもある(つまり、これらの用語は、言語形式の丁寧度や言語表現の丁寧さのみを指すのではないということも改めて強調しておく)。さらに、後に展開する「ポライトネスの談話理論構想」では、「円滑な人間関係の確立・維持のために機能しない言語行動」や、「円滑な人間関係の確立・維持を意図しない言語行動」の効果と

しての「インポライトネス」も、「マイナス・ポライトネス」として捉え、「ポライトネスの談話理論構想」の枠内で、統一的に扱えるものと位置づける。

三 本連載の構成

本連載の前半六回では、まず、これまでの、つまり二〇世紀の内外におけるポライトネス研究の観点の流れを簡単に概観した後、二〇世紀を代表する理論の一つと言っても過言ではないブラウンとレビンソンの「ポライトネスの普遍理論」(Universal Theory of Politeness: 1987)の骨子を分かりやすく整理し、この理論の「社会科学」における意義を、主に、その「斬新性」、「柔軟性」、および「発展性」の観点から、改めて吟味していく。その上で、その問題点を指摘し、個別言語の構造的特徴に影響されることなく、各言語のポライトネスを同じ枠組みで比較・検討し、その「普遍性」を追究するためには、談話そのものも対象とする「デイスコース・ポライトネス」という概念(宇佐美、一九八三)を導入することが必須であるということを論じる。

二〇世紀のポライトネス研究の流れは、言語形式や言語表現の丁寧度の順位付けの試み(言語標本作成)から、語用論

的原則(公理)の模索を経て、相互発話行為の原理(話し手と聞き手、互いのフェイイス処理の原理)、すなわち、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論へと発展してきた。つまり、「静的アプローチ」から「動的アプローチ」へとその関心や方法論が移行してきたとも言える。さらに、二一世紀の語用論研究は、「相互作用」をより動的に捉えるために、「発話行為レベル」から「談話行動レベル」の研究へと展開しつつある。「ポライトネス理論」研究も、その例外ではない。

本連載の後半六回では、今後、「ポライトネス理論」は、どのような問題を克服し、いかに展開していく必要があるのかということ、主に、「ポライトネスの談話理論構想」(宇佐美、三〇〇二)をベースに論じていく。そこでは、以下の四つが主要な論点となる。

① ポライトネスの普遍理論の探究のためには、「絶対的ポライトネス」から「相対的ポライトネス」へと研究対象を拡大する必要がある。

② 「守られていて当たり前である」と期待されている言語行動が現れないときに、初めてそれがいないことが意識され、ポライトではないと認知される」という現象における「守られていて当たり前」の言語行動の状態」を「無標

ポライトネス (unmarked politeness)」と定義し、ポライトネスの研究対象に含める必要がある。

③ 話し手と聞き手の「フェイイス侵襲度の見張り」のギャップが、「マイナス・ポライトネス効果」を生むという捉え方をすることによって、「マイナス・ポライトネス」、つまり、「インポライトネス」も、包括的に説明できるといふ捉え方を提示する。

④ 従来の言語学、社会言語学において、言語使用に影響を与える社会的要因として、「固定的」、「非連統的」に捉えられてきた「年齢」「社会的地位」「性」などの社会的属性や、「上下」「親疎」などの関係の捉え方を、より「動的」、「連統的」さらには「相対的」な捉え方に転換することの重要性を強調する。これらの諸社会的要因を、非連統的に捉えるのではなく、これらの要因が各個人によって「総合的に」判断・処理されて、「フェイイス侵襲度の見張り」の高低に集約されると捉えることによって、複数の社会的要因の影響を、一つの連続体上に表すことが可能になる。こういう捉え方が、インポライトネスも含む、人間の「対人関係調節行動」の普遍原理を追究する「ポライトネスの談話理論」においては、非

常に重要な役割を果たすということを提示する。

次回からは、より具体的な例を盛り込みながら、今回まとめた論点を順に解説していく。

【注】

(1) ここで「politeness」をあらえて「丁寧さ」としているのは、この「politeness」は、Brown & Levinson の定義するような意味ではなく、従来から意味されることの多かった「礼儀正しさ」等に近い意味で用いられているものを表しているからである。

(2) この理論を、「言語理論」と捉えることは妥当ではないことを、十分に認識する必要がある。

【引用文献】

- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Usami, M. (1999) *Discourse politeness in Japanese conversation: Some implications for a universal theory of politeness*. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.
- 宇佐美まゆみ (二〇〇六) 「ポライトネス理論の展開: デイスコース・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報』(冬号版)、東京外国語大学日本課程編、一七二-一八二頁。
- 宇佐美まゆみ (二〇〇二) 「談話のポライトネス: ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』(第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書)、国立国語研究所編、凡人社、九六頁。

(東京外国語大学外国語学部)

言語社会心理学・日本語教育学)

[連載]

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

②

「ポライトネス」研究の流れ

一 「ポライトネス」の捉え方は、いかに変容してきたか

前回は、「ポライトネス」という概念の理解が、なぜ研究者の間でさえ共有されにくいのかということをもとめ、一口に「ポライトネス」と言っても、代表的な研究者によっても定義や捉え方が異なることを、まず認識する必要があるということを論じた。「politeness」の捉え方には、翻訳すると、文字通り、「言葉遣いの丁寧さ」に近いものから、前回も触れたブラウンとレビンソンのポライトネス理論における「フェイイス処理行動」としての捉え方まで、様々なアプローチがある。そのため、いろいろな捉え方を総称して言及する際などの「politeness」の翻訳語としては、「丁寧さ」は意味する範囲が狭すぎ、妥当ではない。そういう意味を込めて、筆者は、一九九二〜九六年頃までは、ブラウンとレビンソン（以後B&L）の定義する、「丁寧さ」とは異なる概念である「politeness」を表すために、原語を意識的に用いてきた。

しかし、近年、語用論への関心が高まるにつれ、日本においても、「丁寧表現」や「丁寧さ」と翻訳すべきではない「politeness」の概念の存在が、ある程度知られるようになってきた。そのため、九七年頃からは、「politeness」に対する

異なるアプローチを総称する言葉として、すべての言語における「言葉遣いの丁寧さ」、「対人関係調節のための言語使用」、「フェイイス処理行動」などの概念を指し得る用語として、カタカナ表記の「ポライトネス」を用いることにした。各々の「ポライトネス」の捉え方は違っても、どのアプローチも指すことのできる総称的な用語も必要だからである。

以下に、これまでのポライトネス研究の流れを、便宜上、まず、欧米と日本に分けて概観する。その後、ポライトネスの捉え方の多様性とその変遷を示すために、四つの主要なアプローチごとに、その特徴をまとめる。

一・一 欧米のポライトネス研究

欧米においても、日本語の「言語形式の丁寧度」や「言語表現の丁寧さ」などと比較的近いニュアンスの「規範的ポライトネス」を明らかにしようとする研究は、言語学者によってなされていた。例えば、「Would you X?」、「Could you X?」、「Can you X?」、「Do X?」などの「丁寧さ」の違いをみるだけ文脈から切り離して扱い、母語話者に等級づけさせるというような研究である (Fraser, 1978)。確かに、このような研究からは、もし、なんの文脈もなければ、言語表現の

丁寧度の評定は、母語話者間でかなりの一致を見えるというようなことは、明らかになかった。しかし、語用論的アプローチでは、言語使用を文脈なしでは扱わないし、言語表現自体の丁寧度の等級づけには、あまり関心がない。ポライトネスも、あくまで文脈を考慮しながら、捉えるからである。

一方、このような、言語表現の丁寧度の順位づけという言語学的アプローチとは異なる観点から「言語使用」を捉え、後の語用論的ポライトネスの研究へも通じる発端となった研究があった。それが、社会心理学者で第一言語習得研究でも著名な Roger Brown と、その同僚の Albert Gilman の研究である。Brown and Gilman (1960) は、ヨーロッパ語における二人称代名詞（仏語における tu と vous 等）の実際の言語使用における選択の仕方とその歴史的変遷に着目し、言語学では、単に複数形 (vous) は、単数形 (tu) より丁寧だというように捉えられていたに過ぎない二人称代名詞の選択を、「実際の使用における使い分けのメカニズム」の解明という観点から研究した。そして、その使い分けを「power (力関係)」と「solidarity (連帯感)」という人間関係にかかわる要因や社会的価値観との関連で説明したのである。この研究は、様々な点で示唆に富むものであり、その後、社会言

語学をはじめとする関連分野に直接的、間接的に影響を与えた。「ポライトネス」への「語用論的関心」も、この先駆的な研究に端を発し発展してきたと言っても過言ではないだろう。しかし、言語学の領域で、「ポライトネス」を、「言語形式の丁寧度」という観点からではなく、「言語使用」に焦点を当てたより広い語用論的観点から捉える研究が脚光を浴びてくるのは、七〇年代も後半になってからのことである。つまり、「丁寧さ」と翻訳すべきではない、「ポライトネス」の研究の発展は、学際的な領域としての「語用論」の発展を待たなければならなかったのである。

一・二 日本におけるポライトネス研究

これまでに述べてきたような広義の「ポライトネス」、簡潔には、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語ストラテジー」という捉え方は、従来の日本の研究にはなかった。つまり、複雑な敬語体系をもつ日本語の研究においては、これまでは、主に、言語形式とその相手、状況、場面に応じた言葉の使い分けに焦点をおいた研究が盛んで、膨大かつ、貴重な研究結果や資料が蓄積されている。しかし、あまりにも豊富な言語の形式にとらわれすぎる余り、「慇懃無

礼」という言葉に表されているような、言語形式の丁寧度の高い表現も、用い方によつては相手を不愉快にさせることもあるというような、実際の言語使用における「対人関係調節効果」という観点から、敬語やその他の言語行動を体系的に捉えようとした研究は、ほとんどなかった。

B & L の「ポライトネス」の観点から、これまでの日本の「ポライトネス」研究を見ると、「敬語」、すなわち、「既に語彙化・文法化されたネガティブ・ポライトネス(第三回に詳述。ネガティブは、否定的なという意味ではない。ここでは、相手の立場を侵害しない配慮というほどの意味としておく)」の研究がほとんどであり、相手をリラックスさせたり、持ち上げるといったような言語行動も含むポジティブ・ポライトネスについての研究はほとんどなかったと言える。つまり、主要ではあるが、ポライトネスの一要素にすぎない「敬語」の研究に偏っていた感があると言えよう。

日本語研究の中の概念、用語としては、「待遇表現」が、「敬語」「丁寧さ」などより、その対象とする範囲が広い。そのため、この「待遇表現」と「ポライトネス」との違いがあまり分からないという人も多いかもしれない。また、「待遇表現」は、ポライトネスではない言語表現、すなわち、罵り表

現なども含むという意味では、一見「ポライトネス」よりも研究対象が広いように見えるかもしれない。しかし、これまでの「待遇表現」の研究は、以下の二点で、「ポライトネス」研究よりも狭い範囲を対象として位置づけられる。①日本語のみを対象としている。つまり、日本語だけではなく、その他の言語にも当てはまるような原理を探究するということを目的としていない。②あくまでも「表現」を対象としており、「言語使用の効果」、「談話レベルの言語現象」などには、あまり視点をおいていない。つまり、「待遇表現」の研究は、基本的には、相手や状況、場面に応じて、「いらいらする」を選ぶか、「行く」を選ぶか、「行きやがる」を選ぶかというような待遇をマークする「言語表現」を対象としており、あいづちの使用や慇懃無礼効果のメカニズム、依頼の前の前置きの有無などは、その対象に含んでいない。逆に言えば、「ポライトネス」研究は、これらをすべて含むということであり、その研究対象の範囲は広い。

本連載後半で焦点を当てる「日本語におけるポライトネス」の捉え方、および、「デイスコース・ポライトネス」という概念は、筆者が、主に、日本語の自然会話データの分析に基づいた研究から発展させてきたものであるが、あくまで、日

本語以外の言語にも適用できる「普遍原理」を探究するための概念である。そういう意味で、「日本語におけるポライトネスの研究」は、日本語を扱っていても、いわゆる日本語の「敬語体系」や「敬語使用の原則」の研究とは、全く関心や観点が異なるものとして位置づけられなければならない。

一・三 ポライトネスに対する四つのアプローチ

ここでは、これまでの「ポライトネス」に対するアプローチを大きく四つに分類し、欧米と日本の研究すべてを含めて、それぞれの特徴を簡単にまとめておく。四つのうち、①は、言語形式重視の捉え方で、②③④が語用論的捉え方である。Fraser (1990) や Thomas (1996) は、①のアプローチは語用論の関心外の問題であり、言語表現の丁寧度の順位づけの標本作成を目標とする社会言語学の対象とはなりえても、語用論の研究対象とはならないことを強調している。本連載も、基本的に、「語用論的ポライトネス」を扱うものである。ここで改めて強調しておきたいことは、これまでのポライトネス理論に関する議論の混乱は、①の言語形式重視の捉え方と、②③④の語用論的捉え方の「ポライトネス」を、混同して論じてきたことにあるということである。つまり、

①のアプローチは、たとえ「ポライトネス」という用語を用いていたとしても、本連載で論じていく「ポライトネス」とは、全く異なる関心や観点から、全く異なる次元のものを扱う「別領域の研究」であることを、再度、強調しておく。

＜言語形式重視の捉え方 (linguistic form view)＞

①規範的捉え方 (social-norm view)——先に述べた Fraser (1978) 等の、主に言語形式に重きを置いた初期の研究で、日本における、質問紙調査に基づいて言語形式や言語表現の丁寧度を順序つけた敬語研究なども、これに当たる。

＜語用論的捉え方 (pragmatic view)＞

②会話の原則としての捉え方 (conversational-maxim view)——主に Lakoff (1975)・Leech (1983) 等のアプローチで、単なる言語表現の丁寧度の問題としてではなく、その語用論的側面からポライトネスを捉えようとしたものである。しかし、「語用論的捉え方」という新しい観点は導入したものの、その原理を「会話の原則」のようなものにまとめようとしたという点で、結局は、①の「規範的捉え方」から抜けきれず、ダイナミックな理論にはならなかったというのが筆者の捉え方である。

③フェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方

(Face-saving view)——Brown & Levinson (1987: 1978) に最初の版が出ている) の捉え方である。ポライトネスの語用論的側面をダイナミックに捉えているが、日常会話のポライトネスなどのように、一見フェイスを脅かすように見えない言語行動におけるポライトネスをうまく説明できないと指摘されている(後に吟味していく)。

④会話の契約としての捉え方 (conversational-contract view)——Fraser (1990) でその概要が提出されたもので、日常のポライトネスを、ある種の「会話の契約」に違反しない行為であるとする捉え方である。権利と義務の相互作用についての理解という概念を提出しているが、それ以上の具体的な記述がなく、今後の発展は未知数である。

二 ポライトネスの普遍性と個別性

「ポライトネス」を、各個別言語の原則としてではなく、普遍的な言語使用の原則として捉えようとする代表的なアプローチは、これまで主に、欧米の研究者によって切り開かれてきた。そのため、いずれのポライトネスの捉え方においても、敬語体系を持つ言語において、例えば、「お忙しいところ、申し訳ありません」と「忙しいところ、悪いね」というよ

うに、内容は同じでも「言語形式の丁寧度」が異なる表現を、「ポライトネス」という概念の枠の中でどのように扱うのかということなどについては、十分な考察がなされてきたとは言えなかった。そういう意味で、B & L のポライトネス理論も含めて、いずれのアプローチも、敬語がある言語とない言語のポライトネスを、言語・文化に偏りなく比較検討できる完全な枠組みを提出しているとは言えないのが現状である。

そのため、日本語のみならず、朝鮮語など敬語体系が発達している言語において、「ポライトネス」がいかに捉えられるのかということを、実証的な研究に基づいて明らかにしていくことは、たとえ一個別言語を扱っていたとしても、世界の「ポライトネスの普遍理論研究」に貢献することになる。諸言語の分析結果を蓄積していくことによって、ポライトネスにかかわる言語行動のどの部分が言語・文化によって異なり、どの部分が共通原理で説明できるのかが探究できるが、そのためのデータを提供することになるからである。

次回からは、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論を解説しながら、「ポライトネスの普遍性と個別性」の捉え方についても論じていく。

【注】ここでは、日常生活におけるあたりきわりのない会話を「一見フェイスを脅かすとは思われないような言語行動」としておいたが、筆者は、すべての発話は、フェイスを脅かす可能性を持っているという立場を取る。例えば、「今日は、土曜日です」という発話は、一見、フェイスを脅かすとは思えない発話であるが、例えば、何かの締め切りが金曜日だったというコンテクストにおいては、十分「フェイスを脅かす言語行動」(FITA) になり得る。つまり、すべての発話は、それがなされるコンテクストというものがあろうと、FITA になり得ると考えるのである。

【引用文献】

- Brown, R. and Gilman, A. (1960) "The pronoun of power and solidarity." In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in Language*. Cambridge: M. I. T. Press and John Wiley & Sons, Inc. 253-276.
- Fraser, B. (1978) "Acquiring social competence in a second language." *RELIC Journal* 9 (2), 1-26.
- Fraser, B. (1990) "Perspective on politeness." *Journal of Pragmatics*, 1, 219-236.
- Lakoff, R. (1973) "The logic of politeness: or minding your p's and q's." *Chicago Linguistic Society* 9, 292-305.
- Leech, G. (1983) "Principles of pragmatics." New York: Longman.
- リーチ (1983) 『語用論』池上 健一監訳 紀伊國屋書店
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: New York: Longman. (改訂版) 田中 忠雄訳 『語用論入門』研究社出版 (1996年)
- 宇佐美 幸子 (1992) 「敬語レベルをみた『politeness』: "politeness theory" の普遍理論確立のために」『ことば』現代日本語研究会 (1992) 30-31
- (東京外国語大学外国語学部)

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

③

B&Lのポライトネス理論(1)

——その位置づけと構成——

一 ブラウンとレビンソンのポライトネス理論は、言語理論ではない

前回は、「ポライトネス」の捉え方がいかに変容してきたかという観点から、これまでの内外におけるポライトネス研究の流れを概観した。簡潔にまとめると、「ポライトネス」は、敬語を有する言語における敬語研究に代表されるように、敬語を有さない言語においても、「言語形式の丁寧度」を問題とする要素主義的な捉え方から、「言語表現の丁寧さ」といった一般常識的な捉え方と大差のない語用論的な捉え方を経て、ブラウンとレビンソンのポライトネス理論(一九八七)における、「人間のフェイス処理行動」としての、一種操作的な捉え方に至ったと言える。

このように、「ポライトネス」の捉え方や研究のアプローチは様々であり、また、変遷してきた。しかし、今日、これらの中でも最も包括的な理論として、言語学のみならず、文化人類学、社会学、社会心理学など関連諸領域の研究者の興味を喚起し、高い評価を受けているのが、ブラウンとレビンソン(以後B&L)の「ポライトネス理論」である。彼らが、従来からある「礼儀正しさ」に近い、一般的な意味での

「ポライトネス」や、日本語で言う「丁寧さ」などという用語が表すニュアンスでは捉えきれない「ポライトネス」の新しい捉え方を提示し、「ポライトネス行動」の普遍理論を提出して以来、ここ二〇数年の間に、彼らの理論に触発された多種多様な研究が、様々な言語において行われてきた。

この理論が、様々な分野の研究者の注目を浴び、これだけの影響を与えてきた主な理由は、この理論が「言語的ポライトネス」(linguistic politeness)と銘うちながらも、言語形式の意味や機能という観点だけではなく、人間関係、社会・心理的距離、相手にかける負担の度合い等、複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮に入れ、それらが総合的に反映された「ポライトネス行動」を、人間の「フェイス処理行動」、すなわち、「対人コミュニケーション行動」として、より包括的かつ、ダイナミックに捉えたからであると言える。

「フェイス処理行動」という捉え方を提起したことによって、B&Lのポライトネス理論における「ポライトネス」は、「語用論的ポライトネス」を扱うものではあるが、言語学の一部門にとどまる「語用論」の枠組みの中で、R・レイコフやリーチが提唱した「ポライトネスの原理」における「ポライトネス」とも、全く性質を異にするものとなった。

すなわち、「ポライトネス研究」の歴史的変遷の中において、「人間のフェイス処理行動」として「ポライトネス行動」を捉えるというB&Lの発想が生じた時点で、ポライトネスの問題は、言語学の問題としてではなく、社会科学の重要テーマの一つとして位置づけられることになったと言える。つまり、「ポライトネス研究」は「言語形式の丁寧度」にかかわる問題を主たる関心事としていた「言語学」の枠を大きく踏み出したのである。

このような「ポライトネス」の捉え方の変遷は、あくまで研究の観点が多様化し、ポライトネス行動が多角的に捉えられるようになったということを示しているのであって、決して、言語学における敬語研究や敬語のない言語における「言語表現の丁寧さ」の研究が不要になったというわけではないことも明記しておく。ただ、各個別言語の敬語研究は、ポライトネスの普遍理論研究とは、全く目的を異にするものであるということを、しっかりと認識する必要がある。重要なことは、同じような言語現象を扱う、観点や目的を異にする研究を、混同して論じてはいけないということである。

にもかかわらず、この言語学の枠を超えたB&Lのポライトネス理論に、これまで最も多く興味を示してきたのが言語

学者であつたという事実が、皮肉にも、ここ十数年来の「ボライトネス理論研究」の議論における混乱を引き起こしてきたと言つても過言ではない。B & Lのボライトネス理論を正確に理解するためには、まず、「この理論は言語理論ではない」ということをしっかりと認識しておく必要がある。

今回から四回にわたつて、二〇世紀の社会科学における代表的な理論の一つと評されているブラウンとレビンソンの「ボライトネス理論」の四側面の骨子を一つひとつまとめながら、この理論に対する誤解の主だったものを取り上げ、解説していく。今回は、まず、「B & Lのボライトネス理論は、複数の側面から構成される複合的な理論である」ということをより明確にするために、この理論の四つの側面の骨子のみを簡潔にまとめる。そして、肝要なのは、この理論の複合性と包括性を正確に理解するためには、その一つ一つの側面を個別に捉えるのではなく、これら四つの側面を総合的に捉えることであるということを、強調する。というのは、この点が理解されていないことが、B & Lの理論に対する誤解に基づく批判を引き起こす大きな原因の一つになってきたからである。

二 ブラウンとレビンソンのボライトネス理論は、なぜ曲解されるのか

B & Lのボライトネス理論の影響力の大きさは、これまでに述べた通りである。しかし、その多大な影響力と比例するかのごとく、彼らの理論に対する批判もまた、様々な観点・角度からなされてきた。しかし、筆者の見る限り、これまでB & Lに触発されて行われた膨大な数の研究の中でも、特に、B & Lの理論を批判したものには、このボライトネス理論で用いられている基本的な概念を大きく誤解しているものが多々ある。そのことによつて、むしろ、この理論の普遍性に疑問を呈したそれらの研究自体の妥当性や信頼性のほうこそ、逆に疑問視せざるを得ないようなものも多い。

B & Lのボライトネス理論の骨格は、以下の四つの側面から構成されている。したがつて、この理論の妥当性を検証するためには、本来は、これら四つの側面すべてを検証した上で、議論する必要がある。しかし、これまでB & Lのボライトネス理論を批判した研究の中には、これら四つの側面すべてを吟味した上で、この包括的な理論の妥当性を論じようとした研究は、ほとんどなかったと言つても過言ではない。

B & Lのボライトネス理論の一側面のみを捉えた、誤解に基づく批判の代表的なものに、次の二種類がある。

①主に、非印欧言語の研究が作例や内観に基づいた例をあげながら、一個別言語の敬語使用の原則を持ち出して、B & Lの理論は、普遍理論であるという主張にもかかわらず、特定の言語の「敬語使用」の原則を説明しないと主張するようなもの (Ide, 1989; Matsumoto, 1988等)。

②B & Lが操作的に定義した「フェイス」(face) という概念を、各文化に固有の「面目」、「面子」、「顔」の概念と混同したまま、B & Lのボライトネス理論における「フェイス」という鍵概念の「普遍性」に疑問を呈し、それを根拠にB & Lのボライトネス理論全体を批判する類のもの (Gu, 1990; Mao, 1994; Matsumoto, 1988等)。

右の①、②に代表されるように、B & Lの理論を批判したもののには、B & Lの鍵概念を誤解したまま、一個別言語の直観的考察に基づいて、この理論全体は是非まで論じようとしたような論文も数多く、そのことが結果的に、B & Lのボライトネス理論の普遍性を、より包括的な観点から正当に検証することを妨げてきた。それどころか、ボライトネスの普遍理論研究の議論に混乱を巻き起こしてきたと言つても過言で

はない。

他方、これらの研究とは異なるより実証的な研究には、「フェイス侵害度見積もりの公式」や「ストラテジーの選択を決定する情況」(次回以降に詳述) の妥当性を質問紙調査などの結果に基づいて検証しようとしたものが多いが、この種の多くの研究にも、B & Lの理論の四つの側面の一、二のみを扱っているものが多く、四つの側面すべてを実証的に検証した上で、この理論の妥当性を論じようとした研究はほとんどない。

ブラウンとレビンソンのボライトネス理論は、なぜ曲解されるのか。その理由は、次の四つにまとめられよう。

①この理論が言語理論ではなく、次節にまとめる四つの側面から構成されるダイナミックな対人コミュニケーション理論であるということが理解されていない。そのため、この理論の一側面だけを見て、この理論全体を批判するというようなことが生じている。

②この理論の核となる鍵概念を表す独特の専門用語に、一般的用語と同じものが使われているため、その理解・解釈に混乱を招き、その専門用語としての意味が正しく理解されにくくなっている (「ボライトネス」「フェイス」「ポジテ



大修館
ウェブ書店

燕館

【 <http://www.taishukan.co.jp> 】

書籍・雑誌のすべてが
ここでわかる。ここで買える。

1 業界最大の書籍情報

新刊を中心に目次などの書籍情報を徹底充実。

2 検索自由自在

書名、著者名、ジャンルなどで大修館の全書籍を瞬時に検索。

3 「月刊言語」バックナンバーを常備

過去5年分の雑誌を常備。目次も閲覧できます。

4 確かなセキュリティ

お客様の情報を暗号で管理。安全に買い物ができます。

5 決済は2通り

代金引換、クレジットカード払いが選択可能。

6 迅速なお届け

ご注文から1週間以内に商品をお届けします。

たとえば、こんな新刊書を取り揃えています—

(数字は本体価格)

ことばの認知科学事典	辻 幸夫 [編]	各研究分野の最新成果を包括する現代の知のハンドブック。	3600
ことばはどこで育つか	藤永 保 [著]	隔離され、養育放棄されて育った子が達げた言語発達とは?	2400
日英対照 動詞の意味と構文	影山太郎 [編]	動詞を分別し英語と対照しつつ、その意味と構文を考察する。	2500
日本語学習者の文法習得	野田尚史 [著]	学習者たちが作り上げる「独自の日本語文法」を解明する。	2200
語用論への招待	今井秀彦 [著]	状況や文脈に即してことばの意味を捉える「語用論」の入門書。	2200
自然科学としての言語学			
一生成文法とは何か—	堀井森樹 [著]	誕生から半世紀を経た生成文法の理念を問う。	2300
シンタクスと意味	原田信一 [著]		
—生成文法—	堀井森樹 [編]	70年代の日本語学界を疾風し天折した天才言語学者の遺産。	10000

さらに詳しい書籍情報は「燕館」で…… ご来店をお待ちしております。

大修館書店

イブ・フェイス」「ネガティブ・フェイス」「ストラテジ」などの用語がそうである。

③「ポライトネス理論」が、日本語などの敬語を有する言語における「敬語理論」と混同されている（これまでも繰り返してきたが、両者は異なるものである）。そのことが、一個別言語の敬語使用の原則を持ち出して、それが、B&Lのポライトネス理論では説明できないというような誤解に基づく批判を生み出している。

④③とも関連するが、B&Lの「ポライトネス理論」が主張する「普遍性」の捉え方が誤っている。例えば、ポライトネスを敬語と同一視するという誤解が、「ポライトネス理論」が「普遍的」であるのなら、各個別言語の「敬語使用の原則」を説明すべきであるというさらなる誤解を生んでいる。各個別言語の「敬語使用の原則」が、それぞれ異なることは自明のことであり、ポライトネスの普遍理論は、それらを説明する目的も必要もない。ポライトネスの普遍理論が主張しているのは、いかなる言語においても、「円滑なコミュニケーション」のためになされる「敬語使用」も含むより広い言語行動」の選択のメカニズムが、「普遍的」であるということである。そのことが理解されていない。

本稿では、以下に、B&Lのポライトネス理論を構成する四つの側面の骨子を簡単にまとめ、この理論は、言語理論としてではなく、包括的でダイナミックな対人コミュニケーション理論として捉える必要があるということを改めて強調し、今後、ポライトネスの普遍理論に関して、より生産的な議論ができるようにするための土壌作りに貢献したい。

三 ブラウンとレビンソンのポライトネス理論の四つの側面

B&Lのポライトネス理論は、大きくは次の四つの側面から構成されている。そのため、B&Lの言う「ポライトネス」を理解するためには、これら四つの観点を有機的に関連づけて捉えなければならぬ。四つの側面とは、すなわち、A「フェイス」という概念、B「フェイス侵害度見積り」の公式、C「具体的ポライトネス・ストラテジ」の記述、D「ストラテジ」の選択を決定する状況」である。

B&Lのポライトネス理論は、ゴフマン (Goffman, E.) などの影響を受けながらも、ブラウンとレビンソンが独自に、かつ、操作的に定義した「フェイス」という概念をベースとして構成されている。つまり、上記Aの「フェイス」

英語を愛する豊かな文化、英語を使う人々の暮らし、英文による手紙・展覧書の書き方など、英語を学ぶ際に必要となるさまざまな背景知識と、現在の英語の姿をまとめた一冊。各界で活躍中の執筆陣により、項目の幅広さ、記述の正確さを目指した。

本書を推薦します
「この本は『国語としての英語』を学ぼうとする人にとってとても便利な本です。英米の文化や生活はもとより、英語圏からアジア諸国まで幅広い情報を提供してくれます。語学・教養的側面から、スピーチの仕方、履歴書の書き方など実務・運用面まで、役立つ情報が満載され、さらに地球環境というグローバルな課題にも配慮がなされています。読み物としても十分に楽しめる『21世紀版・英語百科』と書えるでしょう。」

高橋一幸（神奈川大学・NHKラジオ「英語聴き聞1」講師）

The English Odyssey 社会人のための 英語百科

【監修者】

大谷泰照・堀内克明

●B5判・240頁
本体1500円

第1章 地域環境を知ろう

地球温暖化／オゾン層の破壊
酸性雨／破壊される森林地帯
ゴミ・廃棄物

第2章 英語圏の国々を知ろう

アメリカ合衆国／イギリス／カナダ
オーストラリア／ニュージーランド
アイルランド

第3章 近隣諸国を知ろう

中華人民共和国
大韓民国／朝鮮民主主義人民共和国
シンガポール／タイ
その他のアジアの国々
アジアの英語

第4章 英米の生活を知ろう

アメリカの生活／イギリスの生活
住宅／食料／買い物／交通機関／娯楽
年中行事／教育制度／マスメディア
医療制度／アメリカの職業的スポーツ
イギリスの職業的スポーツ

第5章 英米の文化を知ろう

音楽／キリシタ／ローマ神話
マザーグース／著名人物伝
ヒーロー・ヒロイン
ホビージャパン・ミュージック・雑誌
ことわざ／諺／小説と詩

第6章 英語の語彙を知ろう

英語とはどんな言語か／英語の文字
英語の綴り／発音記号／つづりと発音
単語の作りかた／英字の読み方
カタカナを使った英単語／カタカナ語
和製英語／人の名前／姓／敬称
ボディーランゲージ／英語・英語

第7章 英語の使い方を学ぼう

英語の発音／日記の書き方
手紙の書き方／プレゼンテーションの仕方
論文の書き方／英字新聞の読み方
翻訳の仕方／電話簿の書き方
自己表現の書き方／ビジネス・レターの書き方
留学の仕方／日本を英語で紹介する

コラム／付録

大修館書店

大修館書店ホームページ「英語」でもご注文いただけます。http://www.taishukan.co.jp ▲

という概念を元に、「相手のフェイスを侵害する」という捉え方が生まれ、その「度合い」を見積もるといふ、Bにあげた「フェイス侵害度見積もりの公式」が立てられる。この公式に基づいて、主に相手に対する「フェイス侵害度」が見積もられ、その度合いに応じたポライトネス・ストラテジーが選択される、というのが、B&Lのポライトネス理論の基本的な考え方である。ポライトネスは、「フェイス侵害度を軽減する」ためのストラテジーとして捉えられるのである。そして、Cの「具体的ポライトネス・ストラテジー」の部分には、タミール語やツェルタル語、時には日本語も含めた英語以外のいくつかの言語の例も豊富に挙げながら、B&Lが普遍的だと考えるポライトネス・ストラテジーの主要なものが、かなり具体的に記述されている。そして、五つの主要ストラテジーが選択されるメカニズムを論じたのが、Dの「ストラテジーの選択を決定する状況」である。

ここで重要なことは、上記BからDは、すべてAの「フェイス」という概念を元に組み立てられているということであり、B&Lのポライトネス理論を検証するためには、AからDすべてを総合的に捉えなければならないということである。今回は、今回あげたB&Lのポライトネス理論を構成する

四つの側面の中でも、最も核となるAの「フェイス」という概念と、その概念を元に、人間のポライトネス行動を動的に捉えることを初めて可能にしたと筆者が評価している、Bの「フェイス侵害度見積もりの公式」について、具体例を挙げながら解説していく。

【注】

(1) より詳しくは、宇佐美（二六〇）を参照されたい。
(2) これらの用語については、「ポライトネスのためのキーワード集」『月刊言語』三三二号、及び、本連載の次回以降を参照されたい。

【引用文献】

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
Gu, Y. (1990) "Politeness phenomena in modern Chinese." *Journal of Pragmatics*, 14 (2), 237-257.
Ide, S. (1989) "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness." *Multilingua* 8, 223-248.
Mao, L. R. (1994) "Beyond politeness theory: 'Face' revisited and renewed." *Journal of Pragmatics* 21, 451-486.
Matsumoto, Y. (1988) "Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese." *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
宇佐美まゆみ（二六〇）「ポライトネス理論の展開」デヴィス・ポライトネスという捉え方」『日本研究・教育年報』六五年度版、東京外国語大学日本課程編「二六〇」頁

（東京外国語大学外国語学部）

言語社会心理学・日本語教育学

連載▼ポライトネス理論の展開③

【連載】

ポライトネス理論の展開



宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

④

B&Lのポライトネス理論(2)

——「フェイス」という概念と「フェイス侵害度見積りの公式」——

— なぜ「フェイス」という概念が理解されにくいのか

前回は、ブラウンとレビンソン（以後B&L）のポライトネス理論が、四つの側面から構成される包括的でダイナミックな対人コミュニケーション理論として捉えられる必要があることを論じ、四つの側面を簡単に概観した。今回は、その中の二つ、B&Lのポライトネス理論の鍵概念であるにもかかわらず、誤解され、的外れな批判をされることの多い「フェイス」という概念と、それを元にした「フェイス侵害度見積りの公式」について解説する。このフェイスという概念は、文化的概念としてではなく、操作的定義として捉える必要があること、また、B&Lのポライトネス理論における「フェイス」は、ある行為(x)の「フェイス侵害度の見積りの公式」とあわせて、捉える必要があることを押さえる。

B&Lのポライトネス理論における「ポライトネス」という概念は、「言葉遣いの丁寧さ」とは全く異なるものであるということは、これまでも繰り返し強調してきた。しかし、多くの言語学者にとつて、「ポライトネス」を「丁寧さ」ではなく、「フェイス」(face)という概念を核として成り立つものとして捉えることは、しつくりこないようである。その

大きな原因の一つに、B&Lが極めて操作的に定義した「フェイス」という鍵概念が、どうしても操作的に理解されず、一般常識的な文化に固有のものとして捉えられがちである点がある。中でも最も多い的外れな批判は、以下の二点である。

①「何が「面目」や「面子」を守ることになるのかは、文化によって異なるはずである。文化によって異なるはずの「面目」(face)という概念を鍵概念とする「普遍理論」は、成り立たない」、②「人は、相手の面目(face)だけを考慮してポライトになるわけではない」というものである。

ここで、「face」をあえて「面目」や「面子」と翻訳して使ったのは、「face」を「面目」や「面子」とすると、各々の文化に特有の「面目」や「面子」という概念に縛られて、B&Lのポライトネス理論における「フェイス」を捉えるという誤りが誘発されやすくなるということを示すためである。つまり、「face」という言葉自体には、「面目」や「面子」、「顔」という一般用語、翻訳語が既にあるために、かえってB&Lのポライトネス理論において操作的に定義された「フェイス」という専門用語の概念が共有されにくくなっているという皮肉な現状があるのである。上記の①、②のような疑問や批判は、「フェイス」ではなく、「面目」や「面子」

という言葉を使うからこそ、よりもっともらしく響くのである。また、逆に言えば、B&Lの理論における「フェイス」を、一般的な意味の「面目」や「面子」として捉えるから、このような的外れな批判が生まれてくるのだと言える。

B&Lの「フェイス」(face)の概念は、むしろ、「面目」というより「人間の基本的欲求」と理解しなければならぬものである。B&L自身、「want」という用語も用いている。つまり、対人関係調節における「人間の基本的欲求」として二種類の欲求を想定し、それらに「フェイス」という用語を当てたのである。もちろん、この命名に全く理由がないわけではなく、この「フェイス」の概念は、「対面的相互作用」(face to face interaction)における儀礼的行為を、互いの「フェイス」(face)を保護しあうためのものであると捉えたゴフマン(Goffman, E)のフェイスの捉え方の影響を多分に受けている。ゴフマンやB&Lの「フェイス」の捉え方が、より一般的な日本語や中国語における「面目」や「面子」、「顔」と異なる点は、一般的な「面子」等の概念が、「一定の社会的規範や通念と照らし合わせた自らの立場とかわるもの」であるのに対して、ゴフマンやB&Lの「フェイス」の捉え方は、「他者から独立した個人が、特定の状況

内で持つその場限りの、相対的なもの」として捉えられているという点である。

二 ブラウンとレビンソンのポライトネス理論における「フェイス」の概念

このように、B & Lのポライトネス理論は、「フェイス」という概念を鍵概念としている。社会生活を営む上で不可欠である「対人コミュニケーション」にかかわる基本的欲求として、人間には「ポジティブ・フェイス」(positive face)と「ネガティブ・フェイス」(negative face)という二種類のフェイスがあるとする。「ポジティブ・フェイス」とは、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、他人に近づきたいというプラス方向(外向)への欲求であり、「ネガティブ・フェイス」とは、賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという、マイナス方向(内向)に関わる欲求として捉えられる。「ポジティブ・フェイス」は、他人に近づきたいというプラス方向、外向への欲求を意味するので、「積極的」という翻訳語に近いとも言えるが、「ネガティブ・フェイス」が「否定的な欲求」という意味ではないことは言うまでもなく、また、「消

極的な欲求」というのも当たらない。つまり、この二種類の欲求は、人と人とのかわり合いを图示した際に、プラス方向にかかわる欲求が「ポジティブ・フェイス」であり、マイナス方向に関わる欲求が「ネガティブ・フェイス」であるというくらいに捉えるのが最も妥当である(図1)。

B & Lは、この人間の基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、「ポライトネス」であると捉える。そして、それぞれ、ポジティブ・フェイスに訴えかけるストラテジーを「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」、ネガティブ・フェイスを配慮するストラテジーを「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と呼ぶ。

例えば、「依頼」という行為を考えても分かるように、ある種の行為は、本質的に相手のフェイスを脅かす行為になる。人に何かを依頼するということは、相手に時間や労力をかけさせることになるので、相手の「邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かすことになるからである。B & Lは、このようなフェイスを脅かす可能性のある行為を、「フェイス侵害行為」(Face Threatening Act: FTA)と呼ぶ。そして、「相手のフェイスを脅かす(FT: Face Threat)度合い」すなわち、「フェイス侵害度(FT度)」

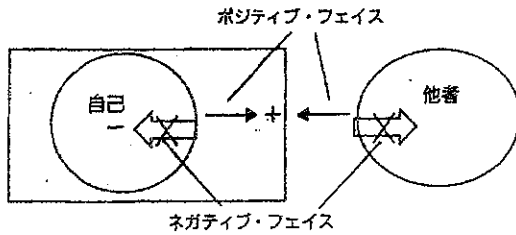


図1 人間の基本的欲求としての二種類のフェイス

を、後述する「フェイス侵害度見積もりの公式」によって見積もり、「見積もられたフェイス侵害度を軽減するために適用する」のが、「ポライトネス・ストラテジー」であると捉える。自分のフェイスを守るために、あえて相手のフェイスを侵害する行為(FTA)を行おうと判断した場合などを除いて、人は、相手のフェイス侵害度を最小まで軽減するようにふるまうはずだと考えられている。当然、フェイス侵害度が高くなればなるほど、よりポライトなストラテジーが必要になると捉えられる。B & Lのポライトネス理論が、「フェイス保持のためのストラテジーとしての捉え方」(face-saving view)と言われる所以である。

この「ポライトネス」が、フェイス保持のための「ストラテジー」として捉えられていることに對しても、誤解に基づく批

判がある。その一つは、Ide (1989)に代表されるもので、「B & Lの理論は、考え得るほとんど無限に近い言語表現の中から、ストラテジーとしてどんな言語表現を選ぶとポライトになるかということの基本としているが、日本語におけるポライトネスは、限られた選択肢の中からの選択の問題である。しかも状況に応じた言語形式の選択は、ほとんど語用論的に制約されており、B & Lが言うように方略的(ストラテジック)に選べるものではない」(筆者訳)というものである。この主張は、日本語における「ポライトネス」を「敬語使用」と同一視するという誤りと、「ストラテジー」を、自覚的なものとして捉えているという二つの典型的な誤りを犯している。ポライトネス理論における「ストラテジー」も、必ずしも話者が意識して使い分けているという意味ではないということを確認しておく必要がある(宇佐美他、2001a)。確かに、日本語の「敬語使用」については、例えば、ある目上の人には、「親しみを感ずるから敬語を使わないようにしよう」などというように、話者個人が意識して方略的に言語形式を選択することは難しい。しかし、それは、「日本語におけるポライトネス」が「ストラテジー」として捉えられるということではない。日本語のような敬語のある言語にお

いては、文レベルにおいては敬語使用の原則の制約を受けやすいからこそ、ポライトネス・ストラテジーは、むしろ、あいつちの使用や、スピーチレベルのシフト操作など、談話レベルからしか見られない言語行動により顕著に反映される形になっていると言えるのである(宇佐美、一九九〇)。ここで、あいつちの使用やスピーチレベルのシフト操作が、必ずしも、「意識的、自覚的」なものである必要はない。

つまり、B&Lの「フェイス処理行動としてのポライトネス」は、日本語のような敬語を有する言語においても、「敬語使用だけではなく、談話レベルの言語行動と敬語使用など文レベルの要素双方の機能を総合的に考察しなければ捉えられない概念」であることを認識する必要がある。この点は、一九九二年以来、宇佐美が一貫して行ってきた主張であるが、B&Lでは十分に検討されていない点である。むしろ、B&Lが、談話レベルの要素の機能を十分理論に取り込んでいないことが、敬語を有する言語の研究者の一部に、ポライトネスを敬語使用と同一視するという誤解(文レベルでポライトネスを捉えると、確かに敬語の役割が大きいため両者を同一視してしまう)と、それに基づくB&Lの理論への批判を誘発する一因になったとも言える。それらの批判自体は的

を射ていないものの、皮肉にも、それらの批判が、B&Lの理論が談話レベルの要素と、敬語を有する言語における言語行動を十分に考慮していないという弱点を露呈することに一役買ったとは言える。これらの弱点を克服し、ポライトネスの「普遍理論」を探究するためには、談話レベルからの分析が必須であるとして、一連の実証的研究における結果に基づき構築されつつあるのが「ポライトネスの談話理論構想」(宇佐美、二〇〇二)である。これについては、本連載の六回以降に詳述していく。

三 「フェイス侵害度見積もりの公式」

B&Lのポライトネス理論を、それまでの言語形式に重きをおいたポライトネス研究、および、語用論的ポライトネス研究を超えるものにしていく点の一つが、「フェイス侵害度見積もりの公式」を提示したことである。

B&Lは、ポライトネスは、ある発話行為(X)が相手にかける負担の度合い、すなわち、フェイス侵害度に応じて規定されるとする。具体的に数値化できるわけではないが、この相手の「フェイス侵害度(Wx)」は、三つの要因によって総合的に規定されるとして、以下のように公式化している。

$$Wx = D(S,H) + P(H,S) + Rx$$

Wx: フェイス侵害度(F.T.度)、行為(X)が相手のフェイスを脅かす度合い

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化で、ある行為(X)が「相手にかける負担度」の絶対的順位に基づく重み(absolute ranking of imposition)

つまり、ある行為(X)が相手のフェイスを脅かす度合い(Wx)、すなわち、フェイス侵害度の重みは、Xという行為(例えば、旅行先で特定のものを購入してもらうよう依頼する)がある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけるかと見なされているかという「相手にかける負担度(R)」と、話し手と聞き手の「社会的距離(D)」(対称的關係)、聞き手の話し手に対する「相対的力(P)」(非対称的關係)の三要因が加算的に働いて決まってくるとする。また、Xという行為が相手にかける「負荷度(R)」の重みづけは、文化によって異なるとしている。この最後の、「同じ行為であ

っても、ある行為Xが、相手にかける「負荷」の見積もりは、文化によって異なる」ということが、この公式に組み込まれているということ、改めて強調しておきたい。というのは、この理論への批判の中には、文化差を考慮していないという不正確な批判も多いからである。

次回は、さらに、この公式の有効性を論じるとともに、具体的なポライトネス・ストラテジーについて考察していく。

【引用文献】

- Lee, S. (1989), "Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness," *Multilingua* 8, 223-248.
 Matsumoto, Y. (1988), "Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese," *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
 宇佐美まゆみ (一九九〇)「談話レベルから見た「politeness」: "politeness theory"の普遍理論確立のために」(「ことば」現代日本語研究会、二四号、二〇-三頁)
 宇佐美まゆみ (一九九六)「ポライトネス理論の展開―ディスコース・ポライトネスという捉え方」(「日本研究・教育年報」九七年度版)、東京外国語大学日本課程編、二四-二五頁
 宇佐美他 (二〇〇二a)「ポライトネス理解のためのキーワード集」(月刊「言語」第三巻第三号、六-七頁)
 宇佐美まゆみ (二〇〇二b)「談話のポライトネス―ポライトネスの談話理論構想」(「談話のポライトネス」)、第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書、国立国語研究所編、凡人社、九-一五頁
 (東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)

【連載】

ポライトネス理論の展開

宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)

⑤

B&Lのポライトネス理論(3)

——「具体的ストラテジー」と「ストラテジーの選択を決定する情況」——

た。また、彼らの言う「原則」には、文化による違いが充分に取り込まれていないという問題点もあった。

例えば、レイコフのポライトネスの原則に「相手に選択の余地を与えよ」というものがある。トーマス(二礼彦)は、それを「西洋的ポライトネスの根幹である」と述べているが、同時に、礼儀正しい中国人の主人は、レストランで客の希望を聞くことなく、適切だと思ふものを選び、時には、皿に取り分けてくれるであろうし、例えば、誰かを家に招く時などのように、状況によっては、この原則に従うことがポライトだとは言えなくなる場合もあると述べている。

これに対して、B&Lは、「フェイス保持のためのストラテジー」という概念を基に、相手の「フェイス侵害度(Fx度)」を見積もる公式を提出した。先回示した「 $Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ 」である。これによって、従来、いくつかの非連続的な「原則」に従った行動として捉えられていた「ポライトネス」を、話者が、相手との「社会的距離(D)」、「力関係(P)」、「相手にかかる負荷度(R)」などの社会的・文化的要因の重みを「総合的に」見積もって、その「度合い」に応じた言語行動を選ぶという、ある程度、予測可能で、動的な捉え方に変換した。この点が、ポライトネス

——なぜ「フェイス侵害度見積もりの公式」が有効なのか
ブラウンとレビンソン(以下、B&L)のポライトネス理論を、これまでの言語形式に重きをおいたポライトネス研究、および語用論的ポライトネスの研究を超えるものにしていく点の一つが、「フェイス侵害度見積もりの公式」である。今回は、まず、その有効性と意義を改めて強調する。その上で、この公式とかわる形で提示されている「具体的ストラテジー」とその「選択を決定する情況」について考察する。レイコフ(R. Lakoff) やリーチ(Leach) が、言語形式自体の丁寧度の問題を超えて、ポライトネスへの語用論的アプローチを試みたことは評価できる。しかし、彼らがそれを、「こういう原則を守れば、ポライトになる」というような、いくつかの「会話の原則」のようなものにまとめたことによって、結局は、ポライトネスの「規範的捉え方」から抜けきれないという感を免れ得なかった。いくつかの原則の間の優先順位などを規定する「原則」が示されていなかったために、個々のケースの解釈はできても、複数の原則にかかわることが共存している場合、どの原則が優先されるのかということについての予測がしにくいという問題点もあった

をいくつかの「原則」にまとめたレイコフやリーチの捉え方と大きく異なる点であり、最も評価されるべき点である。

この、「社会的距離(D)」、「力関係(P)」、「相手にかかる負荷度(R)」という社会的変数のうち、「社会的距離(D)」と「力関係(P)」は、日本の敬語研究で指摘されてきた「親疎」、「上下」という社会的変数と非常によく似ている。しかし、B&Lの「フェイス侵害度見積もりの公式」は、社会的変数を、静的、固定的、非連続的に捉えて、「上下」と「親疎」のどちらが、あるいは、「年齢の上下」と「社会的地位の上下」のどちらが敬語選択への影響が強いかわかるようなことを択一的に同定しようとするのではなく、これらの変数が「 $Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$ 」という公式の中で「総合的に」考慮されて、「相手のフェイスを脅かす度合い」に集約され、その高低が見積もられた上で、言語行動が決定されるという捉え方にまとめた。これが、従来のポライトネス研究、敬語研究のアプローチいずれとも大きく異なっている点であり、ポライトネス研究に画期的な展開を切り開いた点である。この公式の提示によって、敬語を有する言語と有さない言語のポライトネスが、ほぼ同じような社会的変数の影響を受け、同じ枠組みで捉えられるという可能性を示

すことにもなった。これらの点を考えても、この公式の提示は、B & Lのポライトネス理論の中でも最大の功績であると筆者は捉えている。

さらに、もう一つ、この公式の優れている点は、B & Lの理論では文化差が考慮されていないという誤解に基づく批判にもかかわらず、実際には、この公式には、同じ行為でも、文化によって捉えられ方が異なるということを考慮し、それが、R（ある行為が相手にかける負荷度）の重みづけの違いとなつて相手のフェイス侵害度に反映され、従つて、ポライトネスの表現方法も異なつてくるという形で、文化差が重要な変数の一つとして組み込まれていることである。例えば、中国文化では、日本と比べると気軽に、旅先で、〇〇を買つてきてくれるようにと依頼するようであり、その際のポライトネスの度合いも、日本文化で同じことを行う場合ほど高くないようである。それは、この依頼行為に関しては、中国文化では、R（相手にかける負荷度）の見積もりが、日本文化より低いからであると解釈できる。その背後には、異なる価値観や習慣があることは言うまでもない。

- ② ポジティブ・ポライトネス (positive politeness)
- ③ ネガティブ・ポライトネス (negative politeness)
- ④ 伝達意図を明示的に表さない(ほめめかす)。(off record)
- ⑤ FTAを行わない。(doing no FTA)

B & Lの言うように広い意味でポライトネスを捉えるなら、これまでの日本における「いく」「いらっしやる」「おいでになる」などの言語形式の丁寧度やその相手に応じた使い分けに焦点をあてた膨大な敬語研究は、「すでに文法化・語彙化されているネガティブ・ポライトネス」の研究であつたと言つてもいいだろう。また、従来の英語における「丁寧さ」に関する研究でもよく取り上げられてきた「慣用的間接表現」「垣根表現 (hedging)」「名詞化」なども、B & Lの枠組みでは、ネガティブ・ポライトネスのストラテジーとなる。

上記の例も含めて、B & Lは、ポジティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを15、ネガティブ・ポライトネスの主要ストラテジーを10、オフ・レコードの主要ストラテジーを15挙げている。これら主要ストラテジーは、さらにいくつかの、より具体的なストラテジーに分類されているが、ここでは、各主要ストラテジーの主な例をあげるにとどめる。

①の直接的な言語行動とは、緊急の場合等、簡潔に物事を

二 五つの主要ストラテジーとその選択に影響する要因
次に、先にまとめたB & Lのポライトネス理論を構成する四つの側面のうち、C「具体的ポライトネス・ストラテジーの記述」部分を具体例をあげながら示すとともに、Dの「ストラテジーの選択を決定する情況」として、それらのストラテジーの選択に影響を与える要因（フェイス侵害度の大小）について解説する。

ブラウンとレビンソンの枠組みでは、「ポライトネス」は、「社会的距離(D)」、「力関係(P)」、「相手にかける負荷度(R)」という三要因によって規定される「相手のフェイスを脅かす度合い」、すなわち、「フェイス侵害度(Wx)」に応じて使い分けられる「話者の自発的なストラテジー」として捉えられる。そして、以下の五つが主要ストラテジーとしてあげられている。いわゆる「ポライトな」言語行動の分析は、主に、以下の②、③、④が中心となつてゐる。但し、先にも説明したように、「ストラテジー」は、必ずしも意識的であるというわけではないことに、注意する必要がある。

- ① FTの軽減行為を行わず、直接的な言語行動をとる。
(without redressive action, baldly)

述べたほうが良い場合に適用される。「お氣をつけ下さいませよう」お願い申し上げます。」より、「氣をつけて！」の方が適切な場合がある。②のポジティブ・ポライトネスとは、先にあげた、相手の他者から認められたいというポジティブ・フェイスを満たしてあげるように、相手の何かを誉めたり、共通の興味を強調したり、相手を楽しくさせるような冗談を言つたりすることである。③のネガティブ・ポライトネスは、他者に邪魔されたくないという相手のネガティブ・フェイスを保つために、何かを依頼するなど、どうしても相手のフェイスを脅かす行為を行わなくてはならないときに、その度合いを少しでも軽減するように、押しつけがましくない、相手に断る余地を与えるような、間接的な表現をすることである。「傘を貸して下さい。」より、「もし、よろしかったら、傘を貸していただけませんか？」のほうが、よりポライトなのは、この理由による。④の「伝達意図を明示的に表さない」とは、傘を借りたい場合に、依頼をはっきり言語で表現しないで、「今日、傘を持ってくるのを忘れてしまったんです。」のように、ほめめかすにとどめる場合である。この発語は、はっきり傘を貸してくれるよう依頼しているわけではなく、その解釈は、聞き手にかかつてゐる。その意味

で、聞き手の邪魔されたくないというネガティブ・フェイスを脅かすことを最小限にとどめたいと言え。⑤は、相手のフェイスを脅かすような行為はしない。つまり、傘を借りたという意を表明せず、ほのめかしもしないということである。B&Lは、この枠組みで、ほとんどの言語・文化におけるポライトな言語表現が説明できると主張している。

また、B&Lは、相手に敬意を表すと同時に、社会における話者間の関係を指標することにもなる敬語を有する言語においては、「敬語使用の原則を守っている」ということは、「その社会の規範に基づいた敬語使用を守ることによって、相手の立場を侵さない」という意味で、基本的には、相手のネガティブ・フェイスを尊重するネガティブ・ポライトネスになっていると捉えている。筆者も、そのような捉え方で、大筋としては問題ないと考えているが、複雑な敬語体系を持つ言語において、「敬語使用の原則を守っている」ということをひとまとめにして、「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」と片づけてしまうのは、少し大雑把に過ぎると言えるかもしれない。この辺りが、彼らの理論が、「敬語を有する言語」におけるポライトネス行動を、うまく説明していないという批判を誘発する所以にもなっているところである。

り、もう少し詰めていく必要のある点でもある。

敬語使用は、相手の認められたいというポジティブ・フェイスを満たすポジティブ・ポライトネスになる場合もある。特に、敬語を有する言語においては、「全体として敬語使用の原則を守っている」という「デイスコース・ポライトネス」の「基本状態 (default)」(後に詳述)と、「一発話の内容容」(ほめる)と「その内容を表現する際の言語形式」(「いいですね」と「すげえ、いけてる」)の選択の問題の相互作用効果としてポライトネスを捉える必要がある。この点は、日本語のような敬語を有する言語では気づきやすいが、英語のような言語においても同様の現象はあり、同様の発想が必要である。これらについては、本連載後半部にて考察する。

三 ストラテジーの選択を決定する状況

B&Lは、さらに、上記五つの主要ストラテジーのどれを選択するかは、相手のフェイスを脅かす度合いに応じて決定される傾向にあるとして、「ストラテジーの選択を決定する状況」を、上の図のように表している。

この図は、相手の「フェイス侵害度 (FT度)」があまりにも高い場合には、そのFTAを行わないという選択がなさ

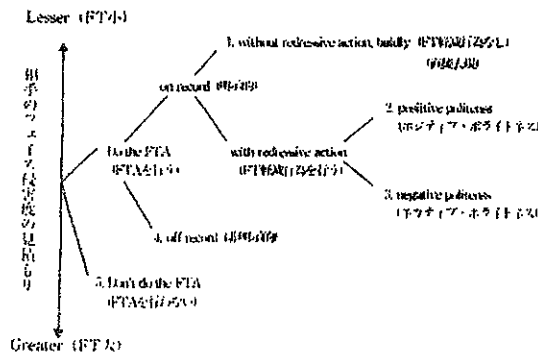


図 ストラテジーの選択を決定する状況
(from Brown & Levinson 1987: 60. 一部簡略化。訳は筆者)

れる可能性が高いことを示している。つまり、FTA (フェイス侵害行為) を行わないのが最善の策と捉えるのである。しかし、FTAを行わざるを得ない場合は、伝達意図を明示するかしなにかに分かれる。「フェイス侵害度」が大さいと思われる場合は、「ほのめかす」などの非明示的ストラテジー (off record) が選択されることが多い。言語で明示的に表現する場合 (on record) は、さらに、「直接的に言う (bald on record)」場合と、何らかのFT軽減行為 (redressive action) を行う場合とに分かれる。FT軽減行為を行う場合には、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーとネガティブ・ポライトネス・ストラテ

ジーがあるとする。

彼らのこの図は、FTが比較的高い場合は非明示的ストラテジーが選択されやすく、FTが小さくなるにつれ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、この順に選択されやすくなるということを示している。つまり、ポジティブ・ポライトネスは、話し手が「相手のフェイス侵害度」が低いと見積もった場合に用いられやすく、FTが最も低いと見積もられた行為の場合は、直接表現が選択されやすいということである。

ここまでで、B&Lのポライトネス理論を、その核となる四つの側面それぞれの観点から概観した。今回は、本連載前半のまとめとして、二〇世紀のポライトネス理論の功績と限界を改めて考察し、今後の発展の方向について論じる。

【引用文献】

- Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London, New York: Longman. (トーマス (1995) 茂羽亮一監修 田中他訳「語用論入門」研究社出版)
宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス・ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』第七回国立国語研究所国際シンポジウム報告書、国立国語研究所編、凡人社、六六頁。

(東京外国語大学外国語学部/言語社会心理学・日本語教育学)

〔連載〕

ポライトネス理論の展開



宇佐美まゆみ
(うさみ まゆみ)



20世紀のポライトネス研究の 展開と限界(まとめ)

——言語形式の丁寧度から発話行為レベルのポライトネスまで——

一 二〇世紀のポライトネス研究のまとめ

これまで五回にわたって、二〇世紀後半に急展開を見せた「ポライトネス研究」を概観してきた。その流れは、敬語を有する言語においては「言語形式の丁寧度」、敬語を有さない言語においては「言語表現」の、それぞれ「絶対的ポライトネス」の順位付けによる体系化を目指す「言語学的アプローチ」から、実際の発話効果に重きを置いてポライトネスの原則をまとめようとした「語用論的アプローチ」を経て、ブラウンとレビンソン(以下、B&L)の「人間のフェイスマイル行動」としてのポライトネスの捉え方へと展開してきた。それは、ポライトネスの捉え方の「形式」から「機能」へのシフトであり、また、分析単位における「文レベル」から「談話レベル(発話行為レベル)」へのシフトでもあり、さらには、言語学の対象であった「ポライトネス研究」から、社会科学における重要なテーマとしての「ポライトネス研究」へのシフトである。より一般的な言い方をすると、ポライトネス研究は、「言葉遣いの丁寧さ」の研究から、「人間関係を円滑にするための言葉遣い」の研究へと展開しつつあるのである。その大きな展開の先鞭をつけたのが、これまで三回に

わたって概観してきたB&Lのポライトネス理論である。この理論の多側面からなる包括性と、具体例の豊富さや、起り得るあらゆる疑問や反論を先取りして事前に答えているかのような考察の多様性と緻密さについては、到底三回では伝えきれない。興味のある方は、是非、原文に挑戦していただきたい。

本稿では、二〇世紀のポライトネス研究の総括として、二一世紀のポライトネス研究の展開への道を大きく開いた二〇世紀最高の社会理論の一つである「B&Lのポライトネス理論」の画期的な点を改めてまとめる。その上で、なお残るこの理論の限界と問題点を論じ、本連載後半として次回から扱う「デイスコース・ポライトネス理論」(宇佐美)の構想、および、二一世紀のポライトネス研究の展望へとつなげたい。

二 B&Lのポライトネス理論のどこが斬新なのか

B&Lのポライトネス理論の最も画期的な点の一つは、「フェイスマイル度見極めりの公式」を打ち立てたことである。もう一つ、この理論の斬新な点は、これまで一般には、「ポライト」という概念とは相いれなかったような、「仲間うち」のマーカ―を使う」ことや、「冗談を言う」ようなことを、

「ポジティブ・ポライトネス」として、彼らの定義するポライトネスの中の重要な言語ストラテジーとして前面に打ち出したことである。このような、広義の「ポライトネス」の概念が提出されたことによって、「ポライトネス研究」は、「言葉遣いの丁寧度」の等級づけリスト作りから、なぜ言語形式の丁寧度は高くても不愉快に感じられる言葉遣いがあるのか、また、なぜ既存の社会言語学的規範からはずれている言葉でも、心地よいと感じることもあるのかというような、まさに「対人コミュニケーション」の観点からの疑問や興味にも答え得る研究に発展したのである。この点が、この理論が言語学のみならず、文化人類学、社会学、社会心理学などの隣接諸科学の関心をも喚起した所以であり、また、この理論が、言語理論ではなく、社会理論として位置づけられる所以である。

また、「ポジティブ・ポライトネス」という概念が導入されたことによって、構造が異なる各々の言語・文化におけるポライトネスの公正な比較のための共通基盤が広がったことも、大きな功績である。敬語の有無や言語表現法は異なっても、例えば、「冗談を言う」ことは、「ポジティブ・ポライトネスになる」というような普遍性を認めやすくなったからであ

る。しかし、「冗談を言う」ことを「ポライトだ」とする捉え方は、日本人のみならず、一般の英語話者にも馴染みが深いものではなく、英語話者の中にも、「politeness」という用語は誤解を生みやすいので、適切ではないのではないかという指摘も以前はあった。しかし、ここ十数年の間に、欧米の雑誌などでは、既に繰り返し「politeness」の特集が組まれ、最近の語用論の概説書でも、B & Lのポライトネス理論は大きく取り上げられるようになった。B & Lが定義している独特のポライトネスの概念も、関連領域ではほぼ定着してきたと言ってもいいだろう（しかし、現在でも、依然として、ポライトネスの捉え方に、解釈の違いや誤解が見られることは、本連載の最初にも述べたとおりである）。

ただ、日本語に関しては、例えば、ポジティブ・ポライトネスを表すために「仲間うちの言葉を使う」ということは、普通は、言語形式の丁寧度を敬体から常体に下げることになる。敬語を使うことが、「丁寧だ」という観念を刷り込まれている大多数の日本語母語話者にとっては、仲間うちの言葉を使うということは、言語形式の丁寧度を下げることになるので、それを、言語行動としてポジティブにポライトだと捉える「ポジティブ・ポライトネス」という発想は、英語話者

にもまして、なかなか理解しにくいようである。「言語形式の丁寧度が低い」ということと「ポライトだ」ということの間にギャップがあるためである。このB & Lの理論では十分に説明されているとは言えない「言語形式の丁寧度と実際の対人コミュニケーション上の効果のギャップの捉え方」については、次回からの、「デイスコース・ポライトネス理論」構想の解説の中で、順次触れていく。

三 B & Lのポライトネス理論のどこが問題なのか

本連載の第三回では、B & Lのポライトネス理論に対する批判には的外れなものが多いことに触れ、この理論がなぜ曲解されやすいのか考察した。B & Lのポライトネス理論は、幾つかの周辺的な問題は残しながらも、総合的に判断して、現段階の言語行為レベルのポライトネスに関する理論としては最も包括的であり、有効な理論であると評価できる。しかし、それでは、この理論が、英語などのような敬語を有さない言語と日本語のような敬語を有する言語のポライトネスを、個別言語の特徴に左右されない、真に公平な同一の枠組みで比較・検討できる普遍的な理論なのかという観点から見ると、以下のような問題点がある。

(1) 発話行為レベル、多くて幾つかの発話行為の連鎖(sequences)レベルの分析に留まっており、より長い談話レベルから見たポライトネスを扱っていない。

(2) 方略的言語使用としてのポライトネスに重きをおいているにもかかわらず、基本的に、ポライトネスを文レベル、発話行為レベルで捉えているために、日本語などのように語用論的に制約力をもつ複雑な敬語体系を有する言語における「文レベル、発話行為レベルのポライトネス」をうまく説明できない。つまり、逆に言えば、そのことが、敬語を有する言語においては、特に、方略的言語使用は、文レベル、発話行為レベルには現われにくいという事実を明確にすることになった。

(3) (2)の事実が、文レベル、発話行為レベルでポライトネスを捉えることの問題点を、露呈している。つまり、文レベル、発話行為レベルでポライトネスを捉えると、諸言語における文法構造の違いや、敬語を有する言語における敬語使用の原則の制約などが強く影響するため、諸言語のポライトネスを公平に比較・検討し、統一的に説明することが困難になる。

(4) フェイス侵害度見積もりの公式によって「方略的言語

使用」の側面が強調されている分、英語などのような敬語のない言語においても、厳然としてある「社会言語学的規範」(sociolinguistic norms)が「話者の方略的な言語使用」に与える影響が、ほとんど考慮されていない。

(5) ポライトネスを発話行為レベルにおけるフェイス保持のストラテジー(Face-saving strategy)として捉えているため、「一見」「フェイス侵害行為」(Face Threatening Acts: FTA)がなじように見受けられる「日常会話」(ordinary conversation)などにおける「無標ポライトネス」(unmarked politeness)、すなわち、「ある言語行動があつて当たり前で、それが欠如して初めてポライトでないと感じられる」ようなポライトネスが、うまく説明できない。

(6) (5)で述べた、「特にポライトでもないが、失礼でもない」言語行動や、「ポライトでない」言語行動、つまり「インポライトネス」を、ポライトネス理論の中で、どのように位置づけ、扱うのが提示されていない。

(7) フェイス侵害度(FI度)の見積もりの公式を導入した点は評価できるが、この理論は、どちらかと言うと、話し手に焦点を当てたものになっている。例えば、フェ

イス侵害度(FIT度)の見積もりに際しても、現実には、話し手の見積もりと、聞き手の見積もりが異なる場合もままある。そのずれの度合いによつては、話し手の意図に反して、聞き手が話し手の言語行動を、失礼だと受け取る場合もあるだろう。このような聞き手の側からの観点や話し手と聞き手の相互作用の観点で、この理論には十分に組み込まれていない。

これらの問題点を克服するために筆者は、「デイスコース・ポライトネス」(DP)という概念を導入した。以下に、そのポイントを述べ、次回からの展開の基礎としたい。

四 発想の転換——「デイスコース・ポライトネス」

以上にまとめたような、B&Lの理論の問題点を解決し、ポライトネスの理論をより普遍的なものへと発展させるためには、敬語を有する諸言語の、それぞれ異なる敬語使用の原則を越えてある、「円滑なコミュニケーションのための言語行動」の原則を、敬語を有さない言語のそれも含めて、公平に同じ枠組みで論じられるようにしなければならない。そのためには、以下の点をあらためて認識する必要がある。

(1) 各言語の構造の違いが大きく影響する文レベルにおけ

る言語表現の比較は不適切である。

(2) 敬語を有する言語においても、従来のように、文レベルにおける「言語形式の丁寧度」だけの問題としてポライトネスを捉えるという発想を転換し、実際の言語使用における発話効果としての語用論的ポライトネスの観点からポライトネスを捉え直す必要がある。

(3) 敬語を有さない言語においても、敬語使用の原則による語用論的制約に相当するような「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」が「フェイス侵害度の見積もり」、すなわち、ポライトネスに与える影響に、もっと注目する必要がある。

(4) 敬語を有する言語、そうでない言語双方において、ポライトネスは、「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」、また、両者の「相互作用」も考慮して、「談話レベル」で捉えていく必要がある。

(5) B&Lが唱えた、一発話行為レベルにおけるフェイス保持のためのストラテジーとしてのポライトネスを、ここでは、「有標ポライトネス」(marked politeness)と呼ぶが、それとは異なるタイプの、「守られていて当た

り前で、期待される言語行動がないときに初めてそれが意識され、失礼、不愉快だと捉えられる」という「無標ポライトネス」(unmarked politeness)も含む「デイスコース・ポライトネス」という概念を導入する。両者は区別して考える必要がある。また、両者を統合するデイスコース・ポライトネス理論を構築する必要がある。

(6) そのためには、発話の連鎖やまとまり、すなわち、文を超えた単位としてのみ談話を捉えるのではなく、また、幾つかの発話連鎖を分析対象とするという意味での談話レベルの分析だけではなく、発想を転換して、「談話」そのものを対象とする必要がある。例えば、「社会人の初対面の会話」や、「二〇代の親しい友人同士の会話」というような一つの「活動の型」(activity type)とも言える特定の談話の無標ポライトネスとしてのデイスコース・ポライトネスを、まず同定する。そして、そのデイスコース・ポライトネスを形作っている諸要素の機能の総体としての「談話」それ自体を、その談話の「基本状態」(default)として、語用論的ポライトネスを規定する変数の一つに加えるのである。このような捉え方することによって、逆に、文レベルの現象の機能

がより明確に見えてくる。例えば、尊敬語や謙譲語の使用・不使用の機能や効果の分析(宇佐美、二〇〇一)は、そのよい例である。

デイスコース・ポライトネス理論では、(5)(6)で述べた「無標ポライトネス」にも対象を広げるとともに、失礼、あるいは、不愉快な言語行動、すなわち「インポライトネス」も、「マイナス・ポライトネス」として同じ枠組みの中で位置づけていく。このように考えていくと、「デイスコース・ポライトネス理論」は、ひいては、「故意に失礼になる場合」の動機に関わる変数なども含めた「対人コミュニケーション理論」へと自ずと展開していくことになる。そのことを念頭に置いた上で、次回からは、ニュートラルな単なる「談話のポライトネス」とは意味が異なる、固有名詞としての「デイスコース・ポライトネス」について解説し、「デイスコース・ポライトネス理論」の構想を展開していく。

【引用文献】

宇佐美まゆみ (二〇〇一) 「デイスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能——敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること——『語学研究所論集』第号、東京外国語大学語学研究所、二二頁

(東京外国語大学外国語学部／言語社会心理学・日本語教育学)